

町民のひろば

自慢あれこれ ⑬ 美術刀剣

押尾喜世治さん (上町第3、75歳)



▲ 刀ダンスを背に名刀清人(きよんど)を鑑賞する押尾さん

子供の頃、琴平神社の縁日に、露店で買ったナイフの切れ味に魅せられて、刃物に興味を持ったのが初まり——と言う押尾さんは、収集を始めて五十年、商売(金物店経営)の上からも刀剣等には深い関わりがあったようだ。

現在は太刀、脇差合わせて二十振程所有、収集を始めた頃は鑑識力が乏しかったので疑物ばかりに手を出し、随分苦い思いをしたそうだが、この経験が見る眼を肥え

させ、愛好家としての押尾さんを更に成長させた。

「名工が魂を打ち込んで作り上げた日本刀の美術的価値は、何物にも換えがたい」と語る押尾さんは、現在、日本美術刀剣保存協会千葉県支部理事として、後輩愛好者の指導にあたっている。



先日、父が、昔の思い出話をしてくれました。その話の中に、栗山川で泳いだということがでてきて、私はびっくりしてしまいました。父たちが、少年のころという、今から二十五年ほど前のことでしょうか。そのころ栗山川は、彼らにとつて、かっこうの遊び場だったようです。しかし、そんな話を聞いて、私たちが、「えっ、うそでしょう。なぜでしょうか。」



栗山川をきれいに

今関恵子 (横芝中三年)

増えていくにしたがつて、ゴミや排水も増えていきます。ゆえに、当然、ゴミ捨て場や、排水設備の完備が必要になってきます。一昔前なら、少しくらい、汚水を流しても、それは自然のもので、川はすぐ元どおりになつたでしょう。しかし、今は化学物質などの混じった水で、川は、自分の力できれいにすることができないのです。

もう一つ、家庭用品や、食料品の普及も、その原因だと思います。

は、できる限り努力をしなくてはなりません。私たちが、無意識に捨てたゴミ、一滴の汚水も、川を一步／＼死へと近づけているのです。

ですから、「私ひとりぐらい」という考えを改めなくてはなりません。ゴミも、小さなゴミも、大きな公害につながるのです。そして、各家庭が、洗剤の使いすぎや家畜のし尿のたれ流しなどに気をつけ、個人が、細心の注意を払わなくてはならないでしょう。

私たちの目に映る、現在の栗山川は、ゴミの川です。水の色も、よどみ、今にも悪臭が漂ってきてそうです。ジュースの空きかん、家庭から出る、さまざまなゴミなどが、あちこちに浮いており、時たま、家畜の死がいも見られます。子どもたちの遊び場であった、美しい川は、どこへ行ってしまったのでしょうか。

私は、こんな川にしてしまった理由に、生活の向上があると思えます。

まず人口の増加です。人々が

今は、何でも豊富ですぐ手に入りますが、流行を追つて、まだ使えるものも捨ててしまふ人がいます。もちろん、燃えないものが多いので、捨て場に困り川へ……。ジュースも、かん入りの普及により、自動販売機で、手軽に買って、かんは、ポイッとすててしまふ……。かつて、子どもらの、かっこうの遊び場だった栗山川も今は、かっこうのゴミ捨て場になっているのです。

栗山川は、まだ生きています。これを死なせないために、私たち

町役場では、あきかん・あきびんの回収を増やしたり、排水設備や、ゴミ入れの完備などをしてほしいと思います。

町に、ゴミひとつ落ちていない所は、どぶ川でさえも澄んだ水が流れています。栗山川を助ける事は、まず、町の中を美しくすることから始まると思うのです。そうすれば、いつかは、かつてのような、子どもたちの遊ぶ川が、戻ってくるのではないのでしょうか。

(栗山川浄化啓発作品集から)

